

SAMURAIのいろは 其のくらゝ
—下克上が生んだサムライの作法

支那の兵法書『孫氏』に「用間<ようかん>の偏」と云う謀略の章がある。五つの謀略を挙げている。1つ因間。2つ内間、3つ反間、4つ死間、5つ生間。ちなみに時代小説に出てくるスパイ、「間者<かんじゃ>」との呼び方は、ここからであろう。

因間とは、敵国の民から褒美をエサに内通者をつくり敵国のさまざまな情報を収集する。内情は住民が一番よく知っている。いまの世の「反日間者」である。

内間は、敵国の大名、また上役に不満を持っている者、給料が安すぎると文句をたれている者。これら不満分子サムライを見つけ、寝返れば領地、恩賞をやると誘い、利用する。

3つ目の反間は、忍び込んでいる敵国の間者に、偽情報を流し、敵を混乱させる。また金を握らせ寝返らせ、逆スパイとする。冷戦時代、この反間が百花繚乱、スパイ映画はネタ切れすることはなかった。

先の濃姫は反間であった。いや、敵の将を利用する手など内門も混ざっている。戦国大名は『孫氏』を必読書としつつも、さらに精緻な策に練り上げていった。

因間も敵国の民を利用するだけでなく、自国の諜報員（細作<ささく>）を敵国に何十年も忍び込ませ、親子二代で情報収集した。これを「草」と呼んだ。因間、内間、反間の三つ巴であった。

この例を挙げたらキリがない。先を急ぐ、死間は謀略のため敵国に忍び込み、成功したら死ぬのを覚悟するもの。いや、死んでみせることも、その当初から織り込み済み。敵はこれにだまされる。

生間は成功し、命があったら生きて帰り報告すること。死間、生間は謀略術ではない。

清く正しい武士道と反する武士道が戦国のサムライであった。しかし、死間など大将への忠義心、郷土愛がないとできない。つまり下克上の世のサムライは、勝つためには毒をも使う一方で、最後に勝ちを決めるのは一族郎党の結束力であることを知っていた。結束のために嘘はつかない忠義心が求められた。この二律背反の葛藤の中で生きていた。戦さと無縁の公家の作法とは違う。

下克上の時代を日本史の汚点のようなことをいう保守主義論客の学者さんがいるが、これは公家かぶれ。

二律背反の葛藤がサムライの作法の原点。

飲む前に茶碗を回す茶道の作法がある。これは毒が塗ってあるかを露骨に調べたら無礼になるから回しながら、さりげなく調べた。サムライの臨戦態勢の心得から生まれた作法。おわかりか。下克上を生き残ったサムライたちの武士の作法を江戸のサムライは様式美に高めた。拙著『使ってみたい武士の作法』で、一番云いたかったことだ。

平和にこしたことはない。しかし、平和とは戦争と戦争の節目であることは人類史が記している。防衛に関わる御仁たち、そして国運を担う政治家よ、サムライの謀略の知恵を煎じて飲め。スパイ天国ニッポンと、いつまでも敵国に晒われないために。いまの日本の平和はいつまでもつづかないのだから。